

佛蘭西革命と奈破崙（第五回）

高田友

(十六)

露西亞また、大陸封鎖令の煽りを受けて、農業經營に壊滅的打撃を受く。一八一二年、歷^{アレキ}山^{サンダ}一世、大陸封鎖令に背反して、英吉利^{イギリス}と貿易を再開せり。

奈破崙即ち懲罰を決意し、各國に命じて六十萬の兵を集め、露西亞の國境を侵す。
露西亞軍殊更に退却し、東方の奥地へと佛軍を誘引す。加之、撤退するに當りては、作物も住居も焼き拂ひて佛軍の用に供する能はざらしむ。

奈破崙秋には蛾桑^{モスキワ} (moth-kuwa→Moscow) を占領したりけるが、露西亞軍の焦土作戦に據りて、兵站斷絶す。さては、冬の訪れぬ前に逃ぐるに如かずとて、坤^{ヒンジン}の方へと撤退に打ち掛かれども、冬の訪れ存外に早くして、兵士のうち力盡くる者擧げて數ふべからず。露西亞を出づる頃ほひ、五人に四人は命を失ふとは畢竟此世の地獄と言ひて過言ならざるべし。

(十七)

露西亞遠征首尾を得ざりしによりて、ヨーロッパ各國離反するに至る。英吉利、プロイセ^{スウェーデン}ノ、奥地、瑞典、また露西亞加はりて、第四回對佛大同盟組織せらる。

一八一三年十月、奈破崙、獨逸ライプチヒに於て、大同盟軍と乾坤一擲大決戦を行ひたれど、慘憺たる敗北を喫して畢んぬ。

命冥加^{いのちみやうが}、佛蘭西へ歸着せる奈破崙を、大同盟軍追撃す。奈破崙善戦せるも敗色濃く、一八一四年四月、大同盟軍つひにパリに入城す。

奈破崙、些かなりと讓歩せむか事態の收拾を見るべからむと思ひたるらむ。退位して愛兒ローマ王（マリー・ルイーズ所生／奈破崙二世）に讓位せむとす。

豈圖らむ、諸國之を認めず、廢殘の英雄をエルバ島（伊太利とコルシカ島の中間）に遷幸せしむ。

年金を給し、刑罰にはあらず、自ら隠居せりとの名にて恥辱を加ふるを避く。

佛蘭西にては、ルイ十六世の弟、佛蘭西に歸り、即位してルイ十八世たり。何爲十七世に非ずやと訝り給ふか。十七世の稱號はルイ十六世の殺害せられたる皇子に贈りたるなり。斯してブルボン王朝復活せり。然而、新國王は兄王の轍^{てつ}を踏みて、相も變らぬ保守反動政策に走り、一朝にして國民の支持を失ふ。

その間、諸國はウイーン會議を開きて、自今歐羅巴を如何すべきと協議せるも、「會議は踊る」と嘲けられたるが如く、諸國の利害紛糾して收拾する能はざりき。

(十八)

後醍醐天皇の隱岐に逼塞せられ給ひしは大略一年なりし。奈破嵩、この先例に倣ひたるか、かかる情勢に鑒みて、一年後にエルバ島を脱出、サン・ジョアン灣に上陸す。モナコ・ニースの坤に該る。時已に一八一五年三月。

國王政府は奈破嵩を制壓せむとするも、國民の先帝を憧憬するや言語に絶するものあり。政府、奈破嵩討伐の爲に兵を送りたるも、皇師に會敵するやさながら「皇帝陛下萬歳」と叫びて、奈破嵩に寢返るといふ顛末を見る。

奈破嵩巴里^{ふくべき}に入り復辟を果す。ルイ十八世は夜半密かに身を以て遁れ、白耳義^{ペルギー}に亡命せり。

歐羅巴諸國は第五回對佛大同盟を結成して、これに對抗す。

而して、奈破嵩戰爭の大團圓^{だいだんあん}、ベルギー・ブリュッセルに近きワーテルローを舞臺として兵戈槍撃^{へいかきょうじやく}たり。敵は、英吉利とブロイセンの聯合軍にして、將は後に印綬^{じゆう}を帶ぶるウエリントンなりき。

またしても武運拙^{つたな}し。奈破嵩の勝利を得ざりし戦は、露西亞遠征は格別、他是ライプチヒとワーテルロー而已^{のみ}なりきと言ふを得べし。敗北の一因は、胃痛に苦しみたればなりとも傳へらる。雙葉山七十連勝成らざりしはアメーバ赤痢の未だ恢復せざるがゆゑなりとせらるるを彷彿せしめざらむや。

(十九)

於是、聯合國釋眼儒心悉皆無之（ここにおいて、れんがふこくしやくぐわんじゅしんしつかいこれなく）、奈破嵩は南大西洋絶海の孤島、南緯十五度瘴癘^{しゃうれい}の地セントヘレナにぞ流されたる。

この地にて奈破嵩は英吉利の役人に虐^{しつた}げられ、悶々として晩年を送りし末に、一八二一年、五十二歳の生涯を閉づ。此地に在ること六年なりき。

砒素を盛られて徐々に毒殺せられたりとの説、當時より有力なりしが、近時、遺髪を分析したる所、果然砒素検出せられたり。

其の名聲一時地に墮つるも、爾後次第に輿論の宥免ありて「よき皇帝」と俗稱せらるるに到り、一八四〇年といふに遺骨巴里に戻るを許されたり。時に、奈破嵩の母いまだ存命にて、「皇帝陛下還御萬歳」と叫びたりとぞ。